

News Letter

■ 特集記事1

日本演劇研究コース：
「現存最古の能楽映像」報告

■ 特集記事2

舞踊研究コース：
「リン・ガラフォラ氏講演会」

■ 特集記事3

「2011年度 国際演劇学会FIRT/IFTR
報告」

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■ 活動報告

- 西洋演劇研究コース P4
- 日本演劇研究コース P5
- 東洋演劇研究コース P5
- 舞踊研究コース P6
- 映像研究コース P7
- 芸術文化環境研究コース P7

■ イベントカレンダー

■ 新刊紹介

編集後記 P8

特集記事 ① 報告

日本演劇研究コース：「現存最古の能映像」報告

フランス・パリ郊外のアルペール・カーン博物館は、すでに現存最古の人形浄瑠璃文楽の映像を所蔵する機関として、本GCOEプログラムには近いところである。同館に所蔵される能の映像が、やはり現存最古のものであることを確認することができたので、簡単な報告をしておきたい（詳しい報告はGCOE紀要に発表予定）。

同館が所蔵する能の映像は、渋沢史料館での展示、NHKから市販されているDVDへの抄録によって広く公開されていたが、従来まったく調査されていなかった。2月末に、児玉竜一・原田眞澄（GCOE研究助手）・菊池慶子（GCOE研究生）の3名がフィルムの確認と複写の依頼に赴き、全貌を確認した。所蔵されている「隅田川」「小鍛冶」「望月」「橋弁慶」「羽衣」には、「1912年、8月」の撮影であり、演者は「KongoKinjiro」もしくは「KongoKinnosuke」とする記録があった。「望月」「橋弁慶」は直面物であり、シテの顔を映像で視認することもできる。それを手がかりに金剛謹之輔の肖像を入手したところ、本人に間違いなしとの確証を得た。別に同館所蔵のオートクローム写真に、能舞台を撮したものがあり、映像のそれと同一と思われた。記録に「Bukkoji」と



あるところから、京都の佛光寺に問い合わせ、1912年から昭和戦中まで同寺境内に能舞台があったこと、写真のそれはその舞台に間違いなしとの証言をいただいた。さらに佛光寺の日誌の存在を教えてくださいましたが、当該月には特に記載のない由を併せてご教示いただいた。「京



都日出新聞」にも、その前後に記載はなかった。

以上を踏まえて、原田眞澄が日誌の原本を閲覧させていただき、『真空上人日誌』1912年10月29日・30日の条に関連する記述を発見、撮影日が10月30日であることを特定した。従来、能を撮した最古の映像として知られていたのは、江島伊兵衛が撮らせたフィルムの集成「名家の面影」（法政大学能楽研究所所蔵）なので、それをさかのぼること約20年、現存する最古の能のフィルムであると確定されたことになる。

アルペール・カーン博物館では、ほかに舞踊に関する重要なフィルムの所在も確認できた。京舞「鉄輪」「三国一」「わしの在所」の3本がそれで、ほかに「小金井の踊り」とする1本もあった。京舞は、吉川一子・松本とめ・池田亀勇の出演で、撮影日や撮影場所などは不明であるが、能フィルムの

撮影に近い所に京都で撮影されたものであろうと推測される。岡田万里子氏（GCOE 研究生）によれば最古とはいえないとのことであるが、それに準ずるまことに貴重な記録であるといえよう。

以上のフィルムの内容は、アルバール・カーン博物館が推

定した回転数でデジタル化した映像に拠っているため、動きの速さをはじめ、今後検討すべき課題が多い。各専門領域において、映像資料全般のさらなる発掘と検証が進展することを期待したい。

（事業推進担当者 児玉竜一）

特集記事 ② 舞踊研究コース： 「リン・ガラフォラ氏講演会」

『バレエ・リュスと20世紀ダンス』 2011年6月14日 26号館302会議室
『アメリカにおけるダンス研究』 2011年6月15日 26号館302会議室

舞踊研究コースでは、バレエ・リュス研究の第一人者として名高いリン・ガラフォラ氏を招聘して連続講演会を開催した。ガラフォラ氏の研究領域は、バレエ・リュスはもちろん広くバレエ史全般、また20世紀ダンス史全般にも及ぶ。徹底した調査にもとづいた学術研究によって世界の舞踊研究を牽引するガラフォラ氏のもつ知見と、長年ダンス研究の第一線で活躍し続けてきた経験に基づく問題意識に触れることができた。またGCOE 研究生を対象とした研究指導もおこない、GCOE 研究生に対する貴重なアドバイスを頂いた。

『バレエ・リュスと20世紀ダンス』と題して行った講演において、ガラフォラ氏はバレエ・リュスが20世紀ダンスの重要な二つの潮流の起源であることを明かした。つまり、ダンスとナショナル・アイデンティティとを結びつける潮流と、ダンスが同時代性を表現する革新的な芸術実践の場となる潮流である。バレエ・リュス以前にはどのバレエ団も国籍に関わりなく芸術家やダンサーを登用した多国籍集団であったが、バレエ・リュスが国家的なアイデンティティを前面に出し、それが大成功を収めた結果、バレエとナショナル・アイデンティティの結びつきは確固としたものとなった。その結びつきの強さは、ダンスの形式としてはバレエでないカンパニーが国家と結びつくことで国立のバレエ団として次々と登場するという事態にまで発展した。他方で、バレエやダンスが同時代性の表現であり得ることを示したのもバレエ・リュスであり、



その試みは様々な形で主に通常バレエとは考えられないダンスによって継承されたことを具体例を挙げるとともに、それらのカンパニーとバレエとの無視できない技術的な結びつきを指摘することで、通常考えられている以上にバレエとダンスの関係が強いものであることを示した。ガラフォラ氏の広範な知識に基づく分析によって20世紀ダンス史研究の新たな展望を拓く講演会となった。

舞踊研究コースではこれまで招聘してきた先生方に舞踊研究を研究としていかに確立するかをテーマとした講演をお願いしてきた。ガラフォラ氏には『アメリカにおけるダンス研究』という題で講演をお願いした。ガラフォラ氏はアメリカにおけるダンス研究の歴史を20世紀初頭から現在まで主に大学とダンスの関係を中心に説明されるとともに、アメリカにおけるダンス研究の問題点、特に批評理論の問題点と今後の展望を話された。1980年代後半以降、批評理論がダンス研究において支配的になった。その結果として理論が適応しやすい周辺の事象に研究が集中し、基本的なバレエやダンスに対する研究が見過ごされることとなった。更に、理論を現実のダンスに押し付ける歪みと歴史研究の方法論に対する軽視にも警鐘をならし、歴史研究こそが舞踊研究の中心にならなければならないと結んだ。

（研究助手 渡沼玲史）



特集記事 ③

「2011年度 国際演劇学会FIRT/IFTR 報告」

2011年8月7日(日)～12日(金) 大阪大学豊中キャンパス

今年の国際演劇学会FIRT/IFTRは日本で開催され、演劇博物館GCOEからも多くの研究生・研究助手が参加し、研究発表を行った。本学会は英語とフランス語を公用語とし、ワーキンググループ、ジェネラルパネル、若手研究者パネル(若手フォーラム)から成るが、今回の大会では、ジェネラルパネルのうち、日本演劇に関する二つのパネル(Japanese Society for Theatre Research Panel)が、日本演劇学会から提供されている。このうち、Audio Visual Resources of Japanese Theatricsには、GCOE事業推進担当者の児玉竜一教授(早稲田大学教授)と元事業推進担当者の内山美樹子教授(早稲田大学名誉教授・GCOE研究協力者)、そして飯島満氏(東京文化財研究所主任研究員、GCOE研究協力者)らが参加し、カーン博物館で発見された日本最古の文楽フィルムなどに関する報告を行った。また、もう一つのパネルJapan and Music Theatreでは、GCOE西洋演劇研究コースで丸本隆教授によって進められているオペラ／音楽劇の総合的研究プロジェクトのメンバーが、日本におけるオペラ／音楽劇の受容と音楽劇研究の現在についての報告を行った。発表者と題目は以下である(発表順)。

森佳子(GCOE研究生)

“Research on Opera / Music Theatre in Japan Today”

佐藤英(GCOE研究生)

“The History of Opera Performances in Japan from 1903 to 2011”

伊藤由紀(GCOE研究生)

“Understanding Opera through Analogies with Noh and Kabuki: Some Aspects of Opera Reception in Japan at the Beginning of the 20th Century”

司会: 山梨牧子(GCOE研究協力者)

また、この他にも以下のGCOE研究生・研究助手が研究発表を行った(日程順)。

■8月8日

久米宗隆(GCOE研究生)

“An Empty Body in *Footfalls*: Presence in Beckett's Drama from the Viewpoint of contemporary Art Criticism”

星野高(GCOE研究生)

“The Teigeki Theatre (Tokyo, 1911-1929) in Context of the Urbanization in the Early 20th Century”

■8月9日

江口正登(GCOE研究生)

“Far from Tokyo: Tadashi Suzuki's Experiments in Toga”

岡田万里子(GCOE研究生)

“Playing House: Para-Familial Community of Traditional Dance in Contemporary Japan”

菊地浩平(GCOE研究助手)

“Samuel Foote's Artificial Left Leg and His Wooden Life-size Marionette”

摂津隆信(GCOE研究生)

“Film and Improvisation: Brecht's *Mysteries of a Barbershop* (1923) and Karl Valentin's Acting”

カティア・チェントンツェ(GCOE研究生)

“Hijikata Tatsumi's Experiments with the Nikutai: Counter-Culture Performance from Innovation to Tradition”

■8月10日

岡本佳子(GCOE研究生)

“Hungarian 'National Opera' at the Turn of the Century: 1884-1914”

奥香織(GCOE研究助手)

“Création, caractéristiques et fonctionnements des valets dans le théâtre de Marivaux”

神崎舞(GCOE研究生)

“The Image of the Lotus in Robert Lepage's *The Blue Dragon*”

齋藤理恵(GCOE研究生)

“Media Interactions In and Out of the Theater: The 'Global Education Project' between Thailand, Malaysia and Japan”

鈴木美穂(GCOE研究生)

“On the Representation of the Revolution: Caryl Churchill's *Mad Forest* as a 'Metamedia' Drama”

鈴木哲平(GCOE研究生)

“L'influence de Racine sur Beckett”

藤原麻優子(GCOE研究生)

“The community of Broadway and *The Musical of Musicals (The Musical!)*”

■8月11日

上田洋子(GCOE研究生)

“Tradition and Innovation: Meyerhold's Biomechanics in Contemporary Russian Alternative Theatre”

堤春恵(GCOE研究生)

“Transforming Shintomi-za: the Illusion of the Opéra in Hyōryū kitan Seiyō kabuki [The Wanderer's Strange Story: a Western Kabuki]”

(研究助手 奥香織)

■比較演劇研究（秋葉裕一）

事業推進担当者である秋葉は、さる5月にトリア大学の「日本週間」に招かれ、ブレヒトや井上ひさしを取り上げて、『日独における過去の克服』と題する講演を行った。日独交流150周年記念の催しの一環である。トリア大学教授陣と岡田利規など日本の現代演劇をテーマに研究交流ができた。ついで8月から9月にかけては、ベルリンのブレヒト資料館や芸術アカデミー、森鷗外記念館を訪問し、ブレヒト、梅蘭芳、ハイナー・ミュラー関連の資料を収集した。エルヴァンゲン・ショプフハイムでは、クライストやブレヒトの関連資料を収集することができた。GCOE研究生の研究支援を目的とする連携研究先の視察を兼ねた出張であった。

■ベケット・ゼミ（岡室美奈子）

ベケット・ゼミでは7月16日、8月22日と定期的に、研究生による発表と2011年度にグローバルCOEから刊行予定のベケット論集についての打ち合わせの機会を持った。

■身体表象論プログラム（坂内太）

身体表象論プログラムでは、7月20日、及び9月15日に、モダニズムにおける身体表象の研究資料を検討した。

■フランス語圏舞台芸術研究（藤井慎太郎）

今年度前期は、フランス語で書かれたテキストを読むゼミを毎週月曜日に開催した（戸山キャンパス33-2号館2階第2会議室）。フランス語の能力を高めること、演劇理論に関する知識を深めることを目的とし、Joseph Danan, *Qu'est-ce que la dramaturgie ?*, Actes-Sud - Papiers, 2010（ジョゼフ・ダナン『ドラマトゥルギーとは何か』）の翻訳を試みた。

■オペラ／音楽劇の総合的研究（丸本隆）

オペラ研究会では、月に1～2回の研究会を中心に活動を行っている。今年度、7月以降これまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2011年7月2日（土）15：00～

場所：早稲田キャンパス8号館219

発表1. 発表者：平井李枝（ピアニスト・ソプラノ、GCOE研究生）

題目：「エンリケ・グラナドスーオペラ作品とカタロニア音楽界への貢献一」

発表2. 発表者：長谷川悦朗（早稲田大学・国立音楽大学ほか非常勤講師、GCOE研究協力者）

題目：「舞台上の光と闇ーロルツィングのオペラ《密猟者》についてー」

発表1では、グラナドスのオペラ《ゴイエスカス》の完成に至るまでの道のりが、彼がカタロニアで行った音楽活動と関連付けて考察された。発表2では、ロルツィングの喜劇オペラ《密猟者》（1842年初演）の「ビリヤード場面」に光が当てられ、この場面には筋進行全体が集約されていることが明らかにされたとともに、光と闇の交錯には劇場照明の歴史的展開における画期的転換が関係していた可能性が指摘された。

日時：2011年8月6日（土）16：00～17：30

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

発表者：中村仁（桜美林大学ほか非常勤講師、GCOE研究生）

題目：「『ゾットするほどモダンな』オペラーヒンデミット《今日のニュース》における自己言及的な構造についての考察」

本発表では、ヒンデミットの3幕オペラ《今日のニュース》に

ついて、上演に接したヒトラーを激怒させた「風呂場のアリア」をはじめ、いくつかの場面を分析しながら、この作品のドラマ、音楽における様々な次元での自己言及的・再帰的な構造とその意義が明らかにされた。

また、8月7日～12日に大阪大学で開催された国際演劇学会で、研究会のメンバーが団体パネルおよび個人パネルで研究発表を行い（特集記事3）、10月8日の研究会では、団体パネルで発表を行ったメンバーによる学会報告が行われた。

日時：2011年10月8日（土）15：00～18：00

会場：早稲田キャンパス8号館219

題目：「日本と音楽劇——日本に於ける『歌劇』の受容とその研究の動向」

発表者（発表順）：森佳子（日本大学非常勤講師、GCOE研究生）

佐藤英（早稲田大学非常勤講師、GCOE研究生）

伊藤由紀（東京大学博士課程、GCOE研究生）

司会：山梨牧子（早稲田大学非常勤講師、GCOE研究協力者）

国際演劇学会のパネル「Japan and Music Theatre」において各人が行った発表内容と質疑応答の内容が紹介され、日本におけるオペラ研究のあり方について考える場となった。

■17世紀フランス演劇研究会（オディール・デュスッド）

17世紀フランス演劇に関する月1回の研究会を中心に活動を行っている。2011年6月以降これまでに行われた研究会・講演会は以下の通りである。

日時：2011年6月18日（土）17：00～18：30

場所：早稲田大学オディール・デュスッド研究室

発表者：西村光弘（GCOE研究生）

題目：「クロード・ペロー『古代人の音楽について』」

科学者クロード・ペローは多声音楽がもっとも美しい音楽であると主張したことから、当時隆盛していたオペラが多声音楽ではないという理由で評価されないこととなり、文学における近代派と齟齬をきたすことになる。本研究会では、17世紀の演劇、特にオペラの要素として重要な音楽に関する論および論争を、特にペローの論を中心に検討した。

日時：2011年7月16日（土）17：00～18：30

場所：戸山キャンパス31号館、演習室01

発表者：榎本恵子（GCOE研究生）

題目：「16-17世紀フランスにおけるプラウトゥスとテレンティウスの受容」

17世紀フランスの作家にはラテン作家の影響が色濃くみられ、翻訳や教育の問題もまた17世紀フランス演劇と密接な関係にある。本研究会では16-17世紀フランスにおけるプラウトゥスとテレンティウスの受容が、劇だけに限らず、翻訳論、教育論の視点からも考察された。

日時：2011年8月6日（土）17：00～18：30

場所：早稲田大学オディール・デュスッド研究室

発表者：野池恵子（早稲田大学非常勤講師・GCOE研究協力者）

題目：「フランス17世紀悲劇における夢の舞台化」

夢の舞台化は17世紀フランス演劇研究において重要なテーマの一つである。17世紀初頭には、夢の中の亡霊が実際に舞台に登場したが、30年代に入ると夢の内容を語りで表すようになる。本研究会では、17世紀フランスの悲劇における夢の舞台化に関して、特に年代による手法と受容の違いに注目して比較・検討を行った。

（研究助手 奥香織・菊地浩平）

日本演劇研究コース：

活 動 報 告

■「舞台美術研究会」報告（近世演劇）

日時：2011年9月20日（火）14：00～17：00

会場：早稲田キャンパス6号館318室（レクチャールーム）

講師：大久保文代（小貫春陽息女）、神山彰（明治大学教授）、
十七代目長谷川勘兵衛（歌舞伎大道具方）、増田一雄（舞
台美術家）※順不同、敬称略

聞き手：児玉竜一（事業推進担当者）

演劇博物館所蔵の「小貫春陽関係資料」に関する研究会を行った。本研究会は本年3月に予定されており、大震災の影響により延期となっていたものである。本資料は歌舞伎背景画家の四代目小貫春陽（1892～1952）の日記や道具帳の写し等から成り、そこから伺い知れる歌舞伎背景画家という職掌のあり方については児玉竜一が以前報告している（『歌舞伎背景画家の仕事——「小貫春陽関係資料」から——』『日欧・日亜比較演劇総合研究プロジェクト』成果報告書、早稲田大学演劇博物館、2008年）。今回の研究会では、春陽御令嬢の大久保文代

氏、歌舞伎大道具方の十七代目長谷川勘兵衛氏、舞台美術家の増田一雄氏、近代の歌舞伎の舞台美術に詳しい神山彰氏に資料の意義や春陽の人柄等について伺った。

春陽による道具帳の写しは、場合によっては職掌の異なる小道具についても詳細な記載がなされ、装置・俳優の動きが注記されるなど非常に緻密なもので、近年では上演が稀な狂言の舞台面を記録したものも多い。各講師からは、当時の舞台の様子を知るだけでなく、今後の舞台上演にも極めて有益な資料であるという指摘があり、特に長谷川氏からは演劇博物館に対して、この貴重な財産の良好な状態での保存を期待するとともに、ゆめゆめ「死蔵」することなきよう、との戒めをも頂戴した。

大久保氏によれば、自宅でも四六時中机に向かって道具帳などを描いていたという春陽の熱意がこもった資料を守り、かつしかるべき公開の方法を探ることが今後の課題である。

（GCOE 研究生 日置貴之）

東洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■2011年度前期定例会

日時：2011年7月30日（土）14：00～16：00

場所：早稲田キャンパス6号館318室（レクチャールーム）

発表者	タイトル
陳凌虹（GCOE 研究生）	『三角対話』（廈門大学出版社、2003年）第八章講読
張景珊（GCOE 研究生）	『中国フェミニズムにおける歴史および曹禺作品の女性像の再検討』

東洋演劇研究コースでは、5月の共同ゼミ、6月の上海京劇に関する特別講義（林幸慧先生）に引き続き、7月30日（土）に2011年度の前期定例会を開催した。前期定例会の内容は、「スタニスラフスキー・システム受容史研究会」（近現代部門）の第五回研究会、および今年度第二回の共同ゼミである。

今回の「スタニスラフスキー・システム受容史研究会」は、従来通りテキストの講読と討論を行いながら、来年1月下旬に開催予定のグローバルCOE国際シンポジウムのテーマに即して、テキストの著者である陳世雄氏の招聘計画と「スタニスラフスキー・システム受容研究会」の最終的な総括について、意見交換を行った。

この国際シンポジウムにおいて、東洋演劇研究コースの近現代部門では、中国現代演劇およびロシア演劇の専門家である陳世雄氏（廈門大学教授）と、中国と西洋の比較演劇、比較哲学の専門家である鄧元江氏（武漢大学教授）を招聘し、それぞれ「中国におけるスタニスラフスキー・システムの受容と影響」と「梅蘭芳とブレヒト」というテーマのもと講演を依頼する予定である。中国の現代演劇における所謂「三大体系」について、日本側の研究者と総合的に意見を交換し、それを土台に最終的な成果をまとめることを期待する。

また、第二回の共同ゼミにおいては、今年度新規に加わったGCOE研究生である張景珊氏（北九州市立大院生）の研究発表および論文指導を行った。フェミニズム発展史の視点から、現代中国の重要な劇作家である曹禺の作品における女性像の変化と、作品を取り囲む時代との関係について考察を行うという研究テーマであった。当日のゼミでは、発表者の博士論文の内容に関して、研究協力者および他のメンバーにより、今後の研究の進め方や論点の絞り方等、それぞれ具体的な意見や方向性が提示された。

（研究助手 李宛儒）

舞踊研究コース：

活 動 報 告

■SDHS (Society of Dance History Scholars) 国際会議「ダンス・ドラマトゥルギー—触媒、パースペクティブ、記憶—」参加報告

日時：2011年6月23日（木）～26日（日）

場所：トロント大学、ヨーク大学（カナダ）

6月にカナダのトロントで開催されたSDHSの国際会議に、舞踊研究コース研究生の北原まり子、越智雄磨の両名が参加した。SDHSは舞踊研究の学会としては世界最大規模を誇り、年

次の国際会議には様々なテーマのもと30年以上に渡って、世界から一線級の研究者たちが集う。

今年度は「ダンス・ドラマトゥルギー」というテーマの下におよそ100人の研究者が集い、38のパネルに分かれて各々の研究成果を発表した。このパネル数は、舞踊研究の観点や方法論、題材の多様性をそのまま反映している。北原は20世紀の舞踊のみならずその他の芸術領域にも多大な影響を与えた「バレエ・リュス」のパネルで、越智は経済的条件がダンスの諸ジャンルの

形成や、芸術家の創作に与える影響に焦点をあてた「エコノミック・トレース」のパネルで発表を行った。その他にも「ポストコロニアリズム」「セクシュアリティ」「民族舞踊」「オーラル・ヒストリー」等のパネルや、実際にダンス・ドラマトゥルグとして活動している研究者たちがレクチャー・デモンストレーションを行うパネルもあり、各発表の後には活発な議論が展開された。

今会議への参加により、人文科学の多岐に渡る成果、方法論が舞踊研究に注がれている様を目にすると同時に、また逆に舞踊という身体芸術を対象にすることで獲得される特有の知見を人文科学にフィードバックするという学問的ダイナミズムを体感することができた。

■グザヴィエ・ル・ロワ講演『視覚イメージの生産と受容』

日時：2011年6月22日（水）18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館（大隈タワー）地下多目的講義室

フランスのコンテンポラリーダンスは1990年代半ばに一つの転換点を迎えたと言われている。この時期に多くの振付家やダンサーがダンスに関する既存の政治や美学に疑問を抱き、多様なダンスの方法論が導きだされた。パリ第八大学を中心とするフランスの研究者たちはこの新たな舞踊ムーブメントを「ヌーヴェル・フォルム」と呼ぶ。ただし、この呼称や定義は暫定的であるため、現在の舞踊研究において、このムーブメントをいかに歴史的に位置づけ、その多様な実践をいかに分類、分析し、理論化するかが一つの課題になっている。その面から観て「ヌーヴェル・フォルム」の急先鋒を担った振付家ル・ロワ氏の日本で最初となる本講演は意義深いものであった。



今回の講演では『ナルシスフリップ』『Self Unfinished』『無題』『春の祭典』という4つの作品を題材として、それぞれの作品に固有の方法論について話して頂いた。「観客は身体の動きだけでなく、動きが作られる方法、その方法が舞台で具体化されるプロセス、動きが代理＝表象するもの、それらを包括的に観ている」という発言に氏独自のコレオグラフィ概念が端的に表されていたと言えるだろう。作品毎に方法論、身体性、視覚性、観客との関係性を変更し、ひいては劇場が伝統的に保持してきた「見る一見られる」という機能さえも更新するル・ロワ氏の斬新な作品に聴衆は大きな関心を寄せ、多数の質問が投げかけられた。

（GCOE 研究生 越智雄磨）

映像研究コース：

活 動 報 告

映像コース（映画史）では、事業推進担当者小松弘とGCOE研究助手山本律が8月20日から25日にかけて中国出張を行い、上海図書館でこれまで継続的に行っていた19世紀末から20世紀初めにかけての新聞による映画記事の調査を行なった。山本は、中国語の新聞によって、中国で初めて映画が上映された時は、中国に暮らす欧米人に向けての映画上映であり、そのような映画上映が、中国人に向けて長期的に映画上映されるようになった経緯とその後の変化についての最終調査を行なった。また、小松は上海で刊行されていたフランス語新聞による調査を1914年の末まで行なった。この結果、少なくとも上海租界における第一次大戦の始まりまでの映画について、原資料の調査を一応完了した。これまでの我々の調査の成果は、2012年1月14日に予定されているGCOE映画史研究中国プロジェクトの国際研究集会で報告されることになっている。この研究集会には、上海大学教授で、現代中国における映画史研究の分野で優れた研究を発表している石川先生にも参加してもらうことになっている。我々は石川先生にお会いし、現在の先生の研究テーマをGCOEの研究集会で是非語って下さるようお願いした。先生は快く引き受けてくださり、現在先生が関心をもっておられる川喜多長政の中華電影での活動について発表することを約束して下さった。我々には全く知られていない中国側の資料を使うようで、今から楽しみである。

9月からは、2012年1月に控えているもう一つの国際研究集会「Acting」についてのシンポジウムに向けて、映画史の研究グループは準備を開始した。9月27日から29日にかけて、フランクフルトの映画博物館でアスタ・ニールセンに関する国際シンポジウムが開かれ、小松及びGCOE研究生小川佐和子がこれに

参加、29日に発表を行なった。アスタ・ニールセンという女優がなぜ映画史において特別な意味を持っているのか、その秘密を多角的に討議するシンポジウムで、アクティングに関する重要な問題が討議された。さらに10月1日から8日にかけて、イタリアのボルデノーネで無声映画祭が開催され、世界中から集まった研究者とこの問題について語り合う機会を得た。1月に我々が呼び寄っているイエール大学のチャールズ・マッサー教授にもここでお会いし、1月の早稲田での研究集会について議論できた。今年のボルデノーネでは、とりわけ俳優の特徴的な演技が確認できる作品が多く上映され、我々は1月の映画史関係の分科会で今回上映されたいくつかの作品から、映像素材の手元にある作品を抜き出して部分上映し、議論のための材料として使おうということを話し合った。例えば舞台俳優の映画における演技、表現主義的な演技、映画の演技における自然主義、形式主義的な映画における俳優の役割、といった議論が、今回ボルデノーネで上映された諸作品によって可能になるように思った。また、アスタ・ニールセンに代表されるように、ある時期の映画における女性の決定的な役割は、映画のアクティングにおいて、特別な意味を持つようにも思え、そうしたコンテクストから、男性の役割についても論じることが可能なのではないかと思える。一般的には映画のスターという言葉で一括りにされているが、女優のいなかった日本の場合は別にしても、1910年代の初めまでのヨーロッパ映画において、女優のもつ決定的な啓示はアクティングに関する研究テーマにおいて是非とも取り上げなければならない議論となるだろう。

（事業推進担当者 小松弘）

芸術文化環境研究コース：

活 動 報 告

芸術文化環境研究コースでは初夏から今秋にかけて以下の研究会を開催した。セゾン文化財団に関する研究会では芸術団体に対する助成の問題を、座・高円寺から講師を招いた研究会では人材育成をテーマとしており、参加者との間でも舞台芸術を支える環境について多角的な視点から議論を交わすことができた。

■セゾン文化財団とは何か 舞台芸術に対する支援と助成のあり方を考える

日時：2011年6月28日(火) 18:30～21:00

講師：片山正夫(セゾン文化財団常務理事)

久野敦子(セゾン文化財団プログラム・ディレクター)

聞き手：松井憲太郎(富士見市民文化会館キラリふじみ館長、グローバルCOE客員講師)

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

当研究会では、民間の芸術助成団体のなかでも長い歴史を持つセゾン文化財団から二名の講師をお招きした。常務理事の片山正夫氏からは、政府や既存の民間財団とは異なる戦略に基づいて成長してきた同財団の歴史についてのお話があった。引き続き、プログラム・ディレクターの久野敦子氏からは、現在セゾン文化財団が提供する助成プログラムの編成、実施に関して具体的な説明をうかがうことができた。

■舞台芸術と人材育成

日時：第6回 2011年7月12日(火) 18:30～20:30

講師：佐藤信(座・高円寺芸術監督)

酒井徹(座・高円寺劇場創造アカデミー)

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

高円寺で地域に根ざした公共劇場として活動する「座・高円寺」が運営する、劇場創造アカデミーについての研究会を実施した。芸術監督の佐藤信氏からは、「公共劇場の公共性」、「地域社会との共生」、「新たな世代の劇場人の育成」といった同アカデミーの理念的な目標に関するご説明を頂いた。一方で、同劇場の制作担当でもある酒井徹氏からは、全受講生が共通のカリキュラムで学ぶ初年度、個々の受講生の進路に応じて専門教育が提供される次年度といった、具体的な教育プログラムに関してご紹介頂いた。

■連続ゼミナール 〈所有〉からアートと社会の関係性を考える

日時：第4回 2011年7月11日(月) 19:00～21:00

第5回 2011年7月12日(月) 19:00～21:00

第6回 2011年9月26日(月) 19:00～21:00

講師：曾田修司(跡見学園女子大学教授)

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

昨年度に引き続き、跡見学園女子大学の曾田教授を迎えて開催している連続ゼミナール。本研究会は、一般の研究会とは異なり、初回に登録した受講者に継続的に参加して頂くことで、「所有」や「アートと社会の関係性」といったテーマを緩やかに共有しながら、受講者各自が研究を進めることを目的としている。前期を通じて参加者間の個々の関心が共有されたことを踏まえ、後期には各受講者からの個人発表をもとに、さらに議論を深めていく予定である。

(研究助手 光岡寿郎)

◆国際シンポジウム ACTING – 演じるということ –

EVENT CALENDAR

当GCOE拠点では、2012年1月27日(金)から29日(日)にかけて、国際シンポジウム「ACTING – 演じるということ」を開催いたします。2011年度は当GCOE拠点の最終年度でもあり、演劇・映像の国際的教育研究拠点としての集大成的な企画となりますので、皆様是非ご来場いただければ幸いです。

日時：2012年1月27日(金)～29日(日)

会場：早稲田大学国際会議場 井深大記念ホール、第一・第二・第三会議室(入場無料・要事前予約、井深大記念ホールの企画は同時通訳付)

2012年1月27日(金)

13:00～15:10 グローバルCOE研究生による研究発表

15:30～16:40 映像上映「アルバール・カーン博物館所蔵能・京舞映像記録上映」

解説：兄玉竜一(早稲田大学文学学術院教授)

17:00～18:00 講演「ある俳優の演技論」

講師：柄本明(劇団東京乾電池座長・俳優)、聞き手：岡室美奈子(早稲田大学文学学術院教授)

2012年1月28日(土)

10:00～12:00 研究コース分科会：

日本演劇、映像、舞踊研究コース

13:30～15:30 研究コース分科会：

東洋演劇、芸術文化環境、西洋演劇研究コース

16:00～17:00 講演「他者を演じること、死を駆り立てること」

講師：キム・ソヨン(韓国国立芸術大学教授)

17:10～18:10 パネル・ディスカッション「非西欧圏におけるプレヒト受容」

パネリスト：陳世雄(アモイ大学教授)、鄒元江(武漢大学教授)、秋葉裕一(早稲田大学理工学術院教授)、司会：平林宣和(早稲田大学政治経済学術院准教授)

2012年1月29日(日)

10:00～11:00 講演「身ぶりの交換／ダンスフィルムを超えて」

講師：エリン・プラニガン(ニュー・サウス・ウェールズ大学舞踊学科専任講師)

11:10～12:10 講演「パフォーマーとしてのアル・ジョルソン ステージからスクリーンへ」

講師：チャールズ・マッサー(イエール大学教授)

13:30～14:30 講演「演劇 行為 再現—演じることの3つの位相」

講師：クリスティアン・ビエ(パリ・ウェスト・ナンテール大学教授)

14:50～15:50 講演

講師：小田島雄志(東京大学名誉教授)

16:10～17:50 パネル・ディスカッション「グローバルCOEがもたらしたもの」

第一部「若手研究者の立場から」、第二部「事業推進担当者の立場から」

司会：拠点リーダー竹本幹夫(早稲田大学文学学術院教授)、拠点副リーダー秋葉裕一(早稲田大学理工学術院教授)

『青騎士の誕生 カンディンスキーの舞台芸術』

(小林奈央子著 早稲田大学出版部 2011年9月刊行)

20世紀前半を代表する抽象画家カンディンスキー(1866-1944)は、1908年頃より色と音と身体運動の協奏による“総合舞台芸術”の創作に意欲的に取り組んでいた。〈舞台コンポジション〉と銘打たれたそれらの作品は、一見すると動く抽象絵画の連なりのように思われるが、そこには当時のヨーロッパの芸術精神を象徴する終末的世界観と、抽象芸術の創作を使命としたカンディンスキーの芸術信仰告白とも言える内容が隠されている。本書は、これらの作品に現れる身体表象と運動表象を図像学的に考察し、隠された主題を解明する。浮かび上がるのは、色彩理論によって描かれる、キリスト教をめぐる宗教闘争とその終末世界の様相、及び芸術を武器に物質主義の価値観と対決し、人類精神のために闘うことを決意した一人の芸術家―“青騎士”の姿である。この研究書はカンディンスキーの舞台芸術だけでなく、抽象絵画の解釈にも新たな見地を切り拓く探求の書としての意味合いを込めたものであるが、同時に“総合舞台芸術”というテーマについて理解を深める参考資料としても意義深いものではないかと思慮する。本書により、民族・宗教等の対立へカンディンスキーが向けた対話共存のメッセージを汲み取って頂ければ幸いである。

(GCOE 研究生 小林奈央子)



『ムーラン・ルージュ新宿座——軽演劇の昭和史』

(中野正昭著 森話社 2011年9月刊行)

かつて新宿の武蔵野通りにあった「ムーラン・ルージュ新宿座」は日本の大衆芸能史にあって一種の伝説として語り継がれてきた存在である。本場パリのレビュー劇場に倣い昭和6(1931)年に開場したムーラン・ルージュ新宿座は、戦災で一時焼失するも終戦後に再開場し、昭和26(1951)年に閉場するまで20年間にわたって公演を行い、その公演回数は実に500回以上に及んだ。本書は、これまで断片的に語られてきたムーラン・ルージュ新宿座について、関係者の証言・プログラム・新聞雑誌等を基に全体像とその時代を描いたものである。これまで日本の喜劇・大衆演劇史は、その性格上、一般的な通史、喜劇役者の評伝、関係者の回想録などが大半をなし、劇団・劇場を演劇史の中に位置づけて検討するという作業が充分とは言いがたかった。こうした状況を考慮し、本書では文学・映画など隣接領域との交錯を踏まえつつ、演劇史の中で一つの喜劇団・劇場を捉えるという演劇研究の基本的な作業を行った。400頁を超えるボリュームを含めこのジャンルとしては新しい試みの一冊である。開場80年・閉場60年の今年、文化の中心に劇場があった時代の舞台娯楽の興亡を記すユニークな研究成果として、ご一読いただければ幸いである。

(GCOE 研究生 中野正昭)



早稲田大学学術叢書 19 『人形浄瑠璃のドラマツルギー——近松以降の浄瑠璃作者と平家物語——』

(伊藤りさ著 早稲田大学出版部 2011年9月刊行)

伊藤りさ氏(GCOE 研究生)は、21世紀COEプログラムから現GCOEまで継続して、本拠点の人形浄瑠璃研究の一角を担う優秀な若手研究者として活躍してきた。伊藤氏の博士学位請求論文が、本書の基となっているが、氏の博士論文の単行本化は、これが初めてではない。本書以前に、早稲田大学モノグラフ28『浄瑠璃と平家物語—源平物語浄瑠璃の作劇法を巡って—』(早稲田大学出版部、2011年3月)が刊行されている。今回の早稲田大学学術叢書本はその増補改訂版である。

義太夫節人形浄瑠璃には凡そ630作の戯曲があるとされているが、その戯曲群の中核を担うのが、平家物語などを典拠とする源平物語の戯曲である。伊藤氏は、「説話」という平家物語の構成要素に着目して、浄瑠璃作者が「説話」をどのように利用して戯曲を書いたのかを読み解くことによって、人形浄瑠璃のドラマツルギーを明らかにしている。平家物語と浄瑠璃戯曲に関わる先行研究は、膨大にある。しかし、作劇法論から作家論、そしてその応用による合作者問題にまで踏み込むような論は見あたらない。従来は典拠論に終始しがちであった研究に一石を投じたと言ってよいだろう。人形浄瑠璃・歌舞伎研究者はもとより、戯曲のドラマツルギーに関心のある東西の演劇研究者に、是非ご一読頂きたい。

(研究助手 原田真澄)



編集後記

ニューズレター第12号をお届けいたします。本年度を締めくくるにあたり、2012年1月に全研究コースにまたがる大規模な国際シンポジウム「ACTING ― 演じるということ」が開催されます。みなさまのお越しをお待ちしております。

(研究助手 大傍正規)

News Letter 第12号

2011年11月15日

編集：大傍正規 奥香織 菊池浩平 原田真澄 光岡寿郎 山本律 李宛儒 渡沼玲史

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>